

# 介護老人保健施設オアシス21 リハ科

**症例概要** ご夫婦でオアシスを利用されているご利用者。ご主人の失語症によりご夫婦でのコミュニケーションが難しくなっていました。セラピストの介入で夫婦の旅行記を一緒に作成。思い出の場面から二人が笑顔になり施設内でのご夫婦の生活を再開でき、更には自宅でのご夫婦生活も実現できた症例。

**【ご主人】** H・K様（90代・男性） 要介護2 アルツハイマー型認知症  
平成30年8月に脳梗塞発症により失語を呈する。平成30年10月、オアシス入所時はYes/Noの反応はあいまい。妻に言葉で伝えられないことがあると「イライラ」と気を荒立てる。

**【奥様】** S・K様（80代・女性） 要介護3 両側変形性膝関節症、慢性心不全で平成29年より入退院を繰り返す。自力でベッドから起き上がることが困難だったが、訓練が進み屋外歩行訓練ができるようになる。平成30年7月入所

## 内 容

ももとはご夫婦で自宅生活を送っていましたが、奥様が入院され身体機能低下により自宅生活困難。さらにはご主人が脳梗塞発症により失語を呈したことにより夫婦でコミュニケーションを図ることが難しい状況でした。

奥様は平成30年7月にリハビリ目的でオアシスに入所。ご主人はご自宅で生活をされていましたが、一人での生活が困難となり、3カ月後の10月にオアシス入所となりました。

夫婦での施設生活のなかでは、奥様がご主人の訓練に必死になり、お二人で毎日「あ・い・う・え・お、1・2・3…」と言葉を繰り返す練習をされていました。

しかし、なかなか言葉が出せず、コミュニケーションが取れないことでご主人はいらだつことが多く、笑顔も見られない状況で、更には施設内での行事にもほとんど参加されませんでした。

そんななか、ご夫婦の生活を再開するにあたって、コミュニケーションが大切だと思い、二人の「旅行記」作成を提案したところ、奥様は「だいたい昔のことで忘れてしまったからもういいよ。」と話され、ご主人も無反応で活動内容を理解されませんでした。そこで、セラピストが準備した写真を見ていただき、「風景に見覚えが無いか?」「そこでどんなことをしたのか?」と聞くと、奥様は次々に思い出の話を語り始めました。また、ご主人には覚えのある写真を選んでいただきました。写真を見ながら奥様もご主人に対して「こんなことあったよね!」などと話しかけており、次第にご主人も笑顔になり、一瞬、地名が言葉となって出たこともありました。

完成した旅行記を施設内に掲示したところ、ご主人は奥様を呼びに行き連れてこられました。奥様は「わかるの?思い出したの?」とご主人に聞くと、ご主人は笑顔でうなずかれています。

今回はご夫婦間で、言葉ではない違う方法でのコミュニケーションが取れることを感じられました。

奥様は2月に先に自宅退所され、ご主人は3月下旬に退所の予定となり、これからはご自宅で夫婦生活をされることになりました。

「旅行記」を通じて失語症ではありますが、ご夫婦での違う形でのコミュニケーションが出来たことで自宅での二人暮らしの自信が付き在宅復帰につながった症例であると考えキラキラ介護賞に推薦いたします。